

大学誘致について質問します。

お許しを頂きまして私は、先の通告の順に従いまして、区長並びに教育長・関係部長に質問します。

まず初めに、「ドリームズ・カム・トゥルー、夢は必ず叶う」、私の質問は、この言葉から始めたいと思います。青木区長は4選目の選挙にあたり、子どもからお年よりまで、区民の誰もが元気で生き生きと暮らせる葛飾を築くために、3つの夢を掲げました。我々、公明党もその夢に共感し、区長の就任にあたり政策協定を締結したところでもあります。その中でも、もっとも大きな夢であり、議会をはじめ区民の皆さんも大いに関心を寄せたのが大学誘致であったと思います。私は、少子化による大学間競争の激化、定員割れ、赤字経営大学の増加と、大学を取り巻く環境が厳しい中で、その道のりは遠いものと考えておりました。しかし、3年が経過した今、その夢が、まさに実現しようとしています。しかも、東京理科大学というブランド力が高く、中小企業対策、理科教育の強化に取り組んでいる葛飾にとって、最良のパートナーとなり得る大学から提案のあったことは、区長をはじめ事務局の皆さんの「夢を叶える」という強い気持ちは結実しようとしているものだと高く評価したいと思います。

また、私は、40 数年ぶりに読み直した本があります。「親譲りの無鉄砲で子どもの時から損ばかりしている。小学校に居る時分、学校の 2 階から飛び降りて 1 週間ほど、腰を抜かしたことがある。」という、皆さんも良くご存じの書き出しで始まる小説、そうです、夏目漱石の「坊ちゃん」です。小説の中で坊ちゃんが卒業したのが、「東京物理学校」、すなわち、現在の東京理科大学なのです。坊ちゃんは、「団子と天ぷらそば」がこの上なく好きということです。

ところで、思い起こしてみますと、我が区の誇る代表的な観光資源で、歴史のある柴又帝釈天の参道には、団子も天ぷらもあります。

先日、東京理科大学で行われた学園祭のテーマは、およそ 100 年前にあまり仲が良くなかった「坊ちゃんと赤シャツの 100 年後の和解」でした。この学園祭のテーマが、24 年度に開学された際には、「坊ちゃんと寅さんの出会い」となることを、私は強く願っております。

大切なことは、ここ葛飾において、坊ちゃんと寅さんが新たに出会い、協力し、共に育っていくということです。坊ちゃんは意気盛んな江戸っ子気質、寅さんは人情厚い下町気質、この 2 人、うまくいかないことはないと思うのです。もしかすると、寅さんは坊ちゃ

んに対して、「おめえ、さしずめインテリだな。俺はインテリが嫌いなんだ。」などと言い出すかもしれません。いろいろ考えると、様々な二人のシチュエーションが浮かんできます。

何が言いたいかといいますと、東京理科大学と葛飾区が、連携を密にし、強い協力関係を築いたうえで、お互いに育っていくということが大切であると考えます。それが、街の賑わいや新たな魅力の形成、ひいては、区民の元気の向上へとつながるものと考えています。確かに、東京理科大学による提案は魅力的なものが多くあります。しかし、それだけでは、区長の夢である元気な葛飾は築けないと思うのです。大学と公園を核とした街づくりを進めていくためには、大学からの提案以外にも、葛飾の特徴である水と緑を生かした道路、公園などの都市基盤整備や大学設備等を活用した事業連携も必要になってくるものと考えています。その際には、東京理科大学と意見交換をしながら、双方にとってメリットが出るように、葛飾区と東京理科大学とがウィン・ウィンの関係を築けるように進めていくことが大切であると考えます。

また、大学との連携において、最も大切であり、成功した際に効果が高くそして難しいものが、ソフト面であると思います。大学誘

致の効果と言われている「知と人の流入による生活・環境面の向上」や「地域課題の協働解決」は、ソフト面の連携により達成できるものであり、知の発展基地・拠点として、それが功を奏することにより、区民の心が豊かになり、元気になっていくものと考えています。そのためには、日本有数の理工系総合大学である東京理科大学さんの機能や特徴を引き出し、区民に還元していくことが必要となると考えます。

まずは、子どもたちの理科、数学離れが叫ばれている中で、全国に先取りした形での教育力の向上に期待したいと思います。例えば、中学入学時に東京理科大学さんの実験、研究室や設備、装置を見学、利用体験させるなど、子どもたちに興味を持たせるというところから始めるとか、小・中学校の教師の資質を上げるために、研修入学させるとか、色々あるかと思います。また、区内中小企業との技術交流にも積極的に取り組んでいただきたいと考えています。産学官連携という言葉は良く聞きますし、考え方にも共感できます。しかしながら、それが具体化している例は、非常に少ないと思います。東京理科大学さんの提案では、産学官連携課という専門の組織が金町に来ることになっています。是非とも、区から東京理科大学さんへ

逆提案をするなど、産学連携を実現していただきたいと思います。

このような区と大学との連携は、区民の意見を取り入れながら進めることによって、その効果が一層高められるものと考えております。そのことが、新たな魅力の創出につながり、街が賑い、区民の心を豊かにする基本であり、区長が3年前に掲げた「区民の誰もが元気で生き生きと暮らせる葛飾」を築く近道であると考えます。

そこで、質問します。

- ① 大学と公園を核とした街づくりを進めるにあたっては、大学からの提案内容以外にも、今後の事業連携や都市基盤整備において必要な支援が出てくると思うが、区としてどのような考えで取り組んでいくのか、その見解をお示し下さい。
- ② 小・中学校の教育力を総合的に高めていくために、大学とどのような連携が考えられるか、区の見解をお伺いします。
- ③ 東京理科大学の特色である科学技術を区内の中小企業に生かしていくために、どのような取組みが考えられるのか、区の見解をお示し下さい。
- ④ 区と大学との連携においては、区民の意見を取り入れることも必要であると考えますが組織整備も含め、区として、どのように取

り組んでいくのでしょうか、ご説明をお願いします。

新型インフルエンザについて質問します

新聞などに目を通しますと、今年（2008年）のインフルエンザは例年に比べて早いペースで流行するのではないかと見られています。

国立感染症研究所の調査では、鳥取県でタミフルが効かない耐性ウィルスの例が報告されていますし、さらに、鳥インフルエンザが変形して発生する新型インフルエンザが大変心配されている状況です。もし、この新型インフルエンザが大流行すれば、通常、「新しいタイプの（新型インフルエンザ）ウィルスが出現した場合には、ワクチンをつくるのに6ヶ月程度はどうしてもかかる」といわれており、世界中で死者7,400万人、日本でも最悪64万人が死亡すると推計されています。

この新型インフルエンザ対策には、既に、備蓄倉庫にマスクや手袋、防護服などを蓄えたりするなど、各地方自治体でも様々な対策を講じていると報じられております。

もうすぐ師走を迎えようとしているこの時期、日増しに寒さが増してきており、インフルエンザの流行が懸念される季節となりました。

これまでのインフルエンザは、ソ連型、香港型などと呼ばれるもので、いまではワクチンもありますからそれほど恐ろしいものではなくなっています。しかし、今、最も懸念されているのが、高病原性鳥インフルエンザ（H5N1型）がヒトからヒトにうつる新しいタイプのものの出現だそうです。鳥のインフルエンザのため発見された当初はヒトへの感染の可能性は少ないといわれていましたが、その後、ヒトへの感染症例がいくつか報告が寄せられているそうです。

この（H5N1型）は、今までのインフルエンザとは違って病原性（毒素）が非常に強いウィルスで、これまでになかったウィルスですからもしそれがヒトからヒトへとうつるものに変異したらほとんどのヒトが免疫を持たず、ワクチンもないため大きな被害がでる可能性が大変心配されています。

伝染病の感染者が爆発的な勢いで拡大することを「パンデミック」といいますが、もし新型インフルエンザのパンデミックが起きた場合、国の試算では、日本の人口の4分の1にあたる3,200万人が感染し、最悪の場合64万人が死亡するといわれています。過去には、1918年スペインかぜ、1957年アジアかぜ、1968

年の香港かぜなど大流行があり、スペインかぜの流行では、世界で4000万人以上が死亡し、日本でも45万人がなくなっているそうです。その後のアジアかぜでも、世界で200万人以上が死亡し、香港かぜでは100万人以上が死亡しているそうです。

もし、この新型インフルエンザに感染するとどうなるかといいますと、熱は38度以上の高熱となり、激しい咳が出て、その後、呼吸困難や全身の臓器の機能不全などの症状を起こし、感染した人の60パーセントの人が死亡するともいわれています。もちろん、新型インフルエンザは実際には発生してみないことにはどれほどの感染が拡大するのか、致死率は何パーセントなのか、正確なところは誰にもわかりません。現在言われているのは、これまで発症した患者の例から推測している数字にしかすぎないそうです。

今後、懸念されるのは、今の（H5N1型）ウィルスがさらに変異して、ヒトからヒトへ簡単に感染するようになることだそうです。

政府は、（H5N1型）ウィルスに対するワクチンをプレパンデミックワクチンとして製造、備蓄しているそうですが、もしこれが、変異した場合、その新型インフルエンザを押さえ込むためのワクチンはそのウィルスが発生してからでなければ造ることはできないと



いわれ、それは、先ほども申しあげましたように、通常6ヶ月程度かかると言われているそうです。

いずれにしても、新型インフルエンザが発生した時は、外出を避けて他人と接触しないようにすることが一番です。そう考えると、会社に行ったり、学校に行ったり、子どもを保育園に預けたりすることは最も伝染する可能性が高いと考えなければならないのです。

新型インフルエンザが爆発的に流行すると、企業の欠勤率は40パーセント以上になると推定されており、そのような場合には感染リスクが多い電車での通勤など止め、車での通勤に切り替えたり、ITを活用した在宅勤務にするなどの対策が必要になります。当然、会社の全部門を動かすことができなくなりますから、どうしても社員が出勤しなくてはならない部署だけを決め、その部分の社員の確保に全力を注ぐことになります。感染が疑われる社員の出社を停止するための判別システムも必要になります。

これは行政も同じです。しかし、区民の生活を直接支えている行政はいったいどのような対処をすればよいのでしょうか。保育園を休園にするか、学校は休校にするのか、福祉施設の運営はどのように継続していくのか、生活保護やDV相談、虐待通報等区民の生活

を直接支える相談業務をどのようにしていくのか、そもそも医療体制はどうなっているのか、等々さまざまな問題点が考えられます。

そう考えると、行政としてこの新型インフルエンザに対してどのように備えをしておくのか、流行した場合はどのように対応していくのか、ということは今から考え準備をしておく必要があると思うのであります。

このような視点から、この新型インフルエンザに対する現在の区の準備状況や対策について何点か質問をさせていただきます。

- ① 国や都、他区の状況を踏まえ、葛飾区は対策準備が充分なのか、お尋ねします。
- ② 区の行動計画策定後、マニュアル作成が課題としてあるが、どのような点が課題なのか、お示し下さい。
- ③ マニュアルは、葛飾区だけで作成しても、東京都や他区のマニュアルと整合性がなければ、意味がないのではないかと、どのように調整していくのか、お尋ねします。
- ④ マニュアルをいつまでにどのような形で策定するのか、お示し下さい。
- ⑤ 医師会、薬剤師会、病院等の医療機関、消防、警察、道路管理者

等の関係機関と連携をどのように図っていくのか。もし、今年度（今冬）流行の兆しが見えた場合、準備はできているのか、最低限、どのような準備が必要なのか、お示し下さい。

⑥ 近い将来に大流行が懸念される新型インフルエンザを正しく知ってもらうため、区内の小・中学校にて特別授業をおこなっては、いかがでしょうか。

⑦ 感染ルートにおいて区民の感染者が発生するだけでなく、葛飾区に生息している野鳥などが、感染源になりうることも考えられます葛飾区は、その際の対応を都・国との連携体制をどのように取り組んでいくのでしょうか。

以上で私の質問を終わります。ご静聴ありがとうございました。